

国指定名勝「旧広瀬氏庭園」  
重要文化財「旧広瀬家住宅」

## 広瀬邸の成り立ち

— 『旧広瀬氏庭園(広瀬公園)調査報告書』より —

久葉 裕可

1 (嘉永四年正月)池所濫觴(嘉永四年正月「菅番公用帳 中郷上原池廻 住友」所収 住友史料館所蔵)

### 池所濫觴

一新居郡中村之内、上原井二御蔵跡三ツ石と申畑場所之儀者、公料私領入組之場所二而、往昔之凡人家百軒余も御座候処、追々村方困窮仕、當時者七拾軒程二相成、殊二近来詰国一円之不熟相統候二付而者畑所猶々不作仕、就中者作り荒シ、既二去嘉永西戌亥三ヶ年者飢饉同様二而、忽村出なと致候者も御座候由、相聞申候、然ル所、同村之内与右衛門と申者有之、去ル寛文之頃者先祖大庄屋も相勤候二付、村方盛衰之根元を能承知仕、從來此畑所を田方二起シ候ハ、繁榮之基と存候得共、大造之溜池築立不申而者、田二起しかたぐ、別而者池普請人用容易二難出来、等閑二打過申処、同人弟増右衛門と申もの、幼年之頃より此儀を承知仕、何卒発起仕度と存候折柄、銅山方出入問屋相勤候井筒屋と申方江、養子二人罷在、此手統を以、銅山方江相談御座候二付、内々見分仕候処、右畠所者一円之場所二而、凡四五拾町許も有之候内、荒処夥敷、殊二深水掛リ等者十分二相見、池築立候時者大半田敷二相成、第一者 公料私領之御国益 付而者窮民相救候而已ならず、銅山飯料之一助二も相成、山師方至極弁利二付、右畑所不殘安歩二買取、猶又水掛等故障無之候ハ、相談二可及筈二治定仕候所、水掛之儀者与右衛門持分田地江相通シ候覺十郎池と申有之、往昔角野村・大永山村江及入割、双方得心之上、書物為取替、岡久保本田へ相通シ候余水を貰ひ請来候二付、此水を分ク候ハ、子細無之、猶又畑所買取之儀者、村方難渋相救候ハ、兎も角出来候筈二而、早速相談仕候故、為念水源角野村江も掛合候処、同所二も村方困窮之者救呉候ハ、如何様共可致筈と承知仕、依之主人(住友惣)吉次郎江申聞 西条様江御願之上、御聞濟之上、同所御役人様御出張被下、則中之町、高尾と申高池築立申候儀御座候事

4 明治七年七月一日 中村上原地悉皆主君友親大君ヨリ頂戴之証(諸用記 壹番)所収

(住友史料館所蔵)

中村上原地悉皆 主君友親大君ヨリ頂戴之証

予州中村上原地御売下之願

一 御主家御持上原地之儀ハ、兼而御承知之次第ニ而、先年西札百貫目之価ヒヲ以テ、中村

旧庄屋政助ナル者江売払之儀御窺ヒ濟ニ相成候処、其後元価ヲ納メ不申、剩工村林之材  
木ヲ無残ニ伐尽シ、不法之所置ヲ致シ候ニ附、元価不納之實メヲ以テ取戻シ候、然ルニ、  
御主家持ニ而ハ逆毛計算之目的不相立、却而御損毛相立候間、私ニ御引受サセ七被仰附候

ハ、桑茶ヲ植附テ開拓仕候而、往々利益ニ至候節、其利益之内十分之式上納可仕段、  
願上候処、去西年二月御採用被 仰附、難有奉存候、就而ハ昨年凶作ニ而下作人ヨリ之

納メ方ヲ以、貢米上納ニ引足り不申、加之ニ桑茶植附テ等彼是多分ニ出費仕候、乍併今

一層奮発シテ終ニ成功致シ度愚存ニ付、何卒前書西札百貫目之元価ヲ以テ、私江御売下

テ被 仰附候ハ、私所有トシテ尽力致シ可申候、実々往々利益之内十分之式ヲ上納之  
儀ハ、其法曖昧トシテ、私後継ニ至不都合ヲ備工候哉ト愚量仕候間、願之通御売下被

仰附候ハ、其金員当年十二月迄ニ相納、各前切替可仕候、官敷御評議伏而奉願上候也

明治七年戊五月

御内

広瀬宰平

旦那様  
表方御衆中

御張紙

先般松山米 一条願濟、此度白水丸事件別而骨折ニ付、而廉ヲ以、右上原地相贈候間、永

ク所持可被致候事

友親

右之通上原地功勳ヲ以テ、主家ヨリ賜ハリ、永世広瀬家所有物ニ候間、子孫之者桑茶ヲ勉

勵シテ、天下之出産物ニ志ヲ尽シ、小經濟ヲ相營シ可申事

明治七年七月一日

広瀬宰平誌

但本紙ハ証文箱ニ入レ置キ候事

5 (明治十九年カ)十月二十七日 広瀬瀧正宛て広瀬宰平書状(抜粋 住友史料館所蔵)

一爰啓上、全家愈平安賀上候、老生無異状、滞京御安心被下候、然ハ別紙之通、大阪大工(而申小一以下同じ)甚兵衛江掛合申候、右ハ元三菱会社河田氏之壯麗ナル建家ヲ觀テ、大ニ感スル所アリ、御心得置、祈候

一河田氏之庭内泉池江、<sup>(正)</sup>昨年来之配慮ヲ以、玉川浄水、水道之余流ヲ囉ハ引込候、其苦心配慮ハ、人家ノ軒下道路、渠溝ヲ穿テ通シ、鉄貫ヲ引キ申候、其地之引水、老生之意見ト大同小異ニ付、兼テ坦氏(広瀬坦)ニ依頼スル久五郎之手ヲ以、周旋スル溪流引込、精々尽力可被成候、猶又当夏一見スル、我屋上之小池アル田面買取之策も施シ、彼ノ水も引取度、充分之手当ヲ致希望候、

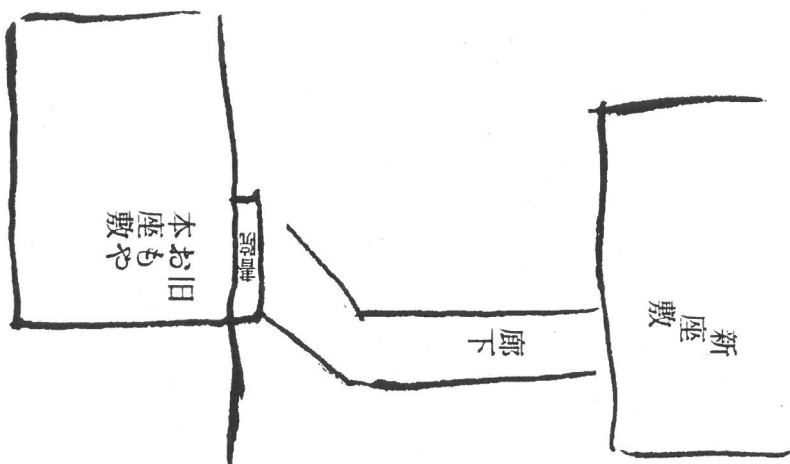
一先書ニ申入候材木ハ、良品ナラシテハ、建造落成之後、イヤ氣ニ相成申候間、其手当注意ヲ要ス、実ニ生木ハ落成之後、木材之枯縮スルニ困却ト、今より案シ申候、但河田氏之建家ハ、凡日本全国之良材ヲ相集メ、驚嘆之至

右直応可得真意、併テ客中平安之状ヲ報スル也、謹言  
十月廿七日  
宰平老人  
広瀬瀧正殿

尚々来月天長節之休暇ヲ偷シ、上下総州国辺江巡遊ヲ相圖リ居申候、甲州も一見いたしました  
き慾アリ

13 (明治二十年)三月十四日 広瀬満正宛て広瀬宰平書状(住友史料館所蔵)

去ル十日出之書面拜見、当方も差出し候、行違ニ相成候、愈御多祥賀上候、当地皆々無事也、新座敷之地形、西南工譲り之儀ハ、既ニ八木甚兵衛より図面を以、協議ニ相成、同意いたし候、猶為念、左ニ



右之如ク廊下ヲ廻方ラセ候ハ、決テ不都合無之、却テ旧宅ト新座敷ノ方、狭クナクシテ最モ妙也

一 植木や清兵衛下向、築造中之由、多忙と存候、右庭園図面之南西之方ニ小山ヲ作り、其植木は、東京松ニいたし度、別紙之通り、在東京松本氏ニ依頼セシ所、近日送り来ルよし、併シ直様其地工送ルニ、船便之都合ニて隙取り日数ノ恐レアリ、依之本年ハ神戸諏訪山ニ仮植シテ、来年之春其地江移シ可申、遠計也、其積リニて築造いたし候様、清兵衛江一聲ノおき可被成候

一 奥西席吉江之為替金、百三十円之処、過百百拾円之証廻リ申候、あと廿円御受取可被成候  
 一 小生帰阪後、実ニ大多用寸暇なし、明日頃より神戸山居ニ避ケ可申、来ル廿三四日頃迄ハ、右諏訪山ニ暫居ス、

右貴酬附郵便、勿白

三月十四日

満正殿

老宰

17 (明治二十年) 広瀬宰平・八木甚兵衛掛合ノ写 (住友史料館所蔵)

大阪 八木甚兵衛江掛合ノ写

一別紙図面朱書之分、模様替二致し度、御勘考可被成候  
 一天井上板張方ハ、二間とも違ひ候事



拾五丈ノ間



拾丈ノ間

一床ノ間之右キ柵ノ上下台板共、ケヤキ極良材ヲトキ出シ塗ニ致し度事  
 一座敷ふた間、其上エ敷廻ハリ古風ノナケシ、下ト中廻ハリニいたし度事

床ノ間江廻ハル所も同断

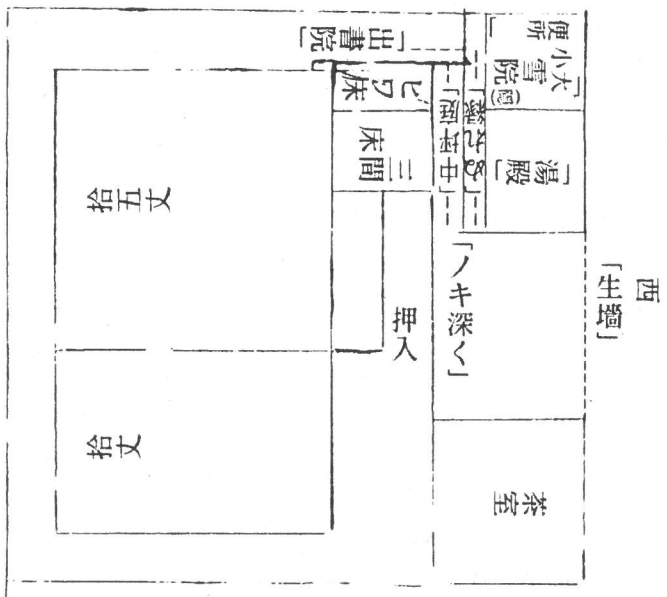
但御殿作りニ、板幅セマク飾リ釘ナシ

此ニケ所共古風ノ仕立子ハ、却子見込アリ、広間三間床ニ付

一障子ノ細工ニ付意見アリ、他日可申入候

右

〔朱書之分模様替、内造作ハ他日相談ス〕



○図中の「」書は朱書、---は朱線。

(前略)

梅月庵家根も落成之由、追々発花之時、殊二南面隅暖室蕉翁之楽ミ、妙と存候、大工伊助・銅職人再行、残務追々片附々多事と存候、(中略)我宅水源トスル畑ト山林共菅町九反歩買取ハ、老生ノ渴望スル所、致大喜候、右水源ヲ能ク実験シ、水脈多量ノ処ニ小洞ヲ穿テ、其処ニ水分ヲ集合サセ、我宅常用水ノ欠乏ナキヲ要ス、因テ鉞山坑間方ニ示談シ、坑夫ヲ使用シ、水道ノ濶図ヲ指揮可被成候、差急キ不申候ハ、老生下向後ニてもよろしく候、官林拝借之願ヒ、許可都合も妙也、自宅高棟上之電除<sup>雷</sup>ケ、其処ニ相成候と存候、是も岩佐<sup>音佐</sup>技師ニ能ク方法ヲ聞キ、速ニ架設被成候、我宅天ニ聳工居リ、初夏ノ頃雷鳴ノ予防怠ルベカラズ、新座敷ノ外ト障子ハ、成尺々腰板<sup>文</sup>の低キ方ヲ要ス、日光ヲ遮ル時ハ室内陰鬱、或ハ冬日暖氣ニ害シ申候、此立具ハ其地ノ大工ニ製成スルトノ事ニ附、紙論申通シ候、大阪岡氏ヨリ来信アリ、銅塔出来上リ、近日和船ヲ以、積送り候との事也、銅飾高貴ニ際シ、地銅代金ノ違ヒ、且彫刻之文字加増ニテ、四五十円ノ増方ヲ申出、凡六百円ヲ消費いたし候、該建立ノ職人下向ハ、老拙五月頃か下向之時ト延し候間、銅塔着ク之上ハ、仮ニ組ミ立テ、筒数ヲ御改メサセ置キノ事、右客中徒然之余、奉復如此ニ候、勿々謹言

二月二日

宰老人

広瀬瀧正殿  
侍史

随行之面々も宜ク申出候也

【史料引用・参考文献】

- ・新居浜市教育委員会『旧広瀬氏庭園(広瀬公園)調査報告書』二〇一七年
- ・同右『別子銅山の近代化を見守った広瀬邸―旧広瀬邸建造物調査報告書』二〇〇二年